第１８２回　番組審議会

１．日　時　　平成２１年5月１３日（水）１２：００～

２．場　所　　メトロポリタン盛岡ＮＥＷ　ＷＩＮＧ　３Ｆ「星雲東の間」

３．委　員　　委員総数　　１３名
　　出席委員数　　９名（欠席委員数　４名）

○ 出席委員（敬称略）

椎井　一意（副委員長）
―以下５０音順―
久慈　浩介
斎藤　雅博
東海林　千秋
菅原　正二
中川　真
中原　祥皓
村上　幸子
吉田　浩次

○会社側出席者（7 名）

内海　幸司（代表取締役社長）
佐藤　滋樹（常務取締役）
小原　忍　（常務取締役）
藤澤　利憲（常務取締役）
前田　秀男（取締役技術局長）
一戸　俊行（報道局長）
野牛　あかね（報道局　報道部）

○事務局　　村田　重昭

４．議　題　「球史に刻め！ 俺たちの夢 ～花巻東高校 オール岩手で挑んだ日本一～」
平成21年4月11日（土） 16:00～16:30放送

５．議　事　概　要

今回は、「球史に刻め！ 俺たちの夢 ～花巻東高校 オール岩手で挑んだ日本一～」について審議した。

各委員からは「『野球だけではなく、生活態度でも日本一を』という佐々木監督の言葉は県民を勇気づけ、教育的効果も大きかった」、「選手たちのオール岩手への熱い思いが良く分かった」、「日本一を目指すという目標を、監督と選手が共有することの大切さが伝わった」などの意見が出た。

また「インタビューの画面にもうひと工夫欲しかった」、「花巻東高校や野球部の歴史の紹介、ライバル校の選手のコメントなど、番組の作りにもう少し広がりが欲しかった」との意見があった。

６．議　事

○事　務　局

ただいまより第１８２回番組審議会を開催いたします。

議題に入らせていただきます。今回の議題は「球史に刻め！ 俺たちの夢 ～花巻東高校 オール岩手で挑んだ日本一～」です。本日は、プロデューサーの一戸報道局長とディレクターを務めました報道部の野牛あかねが出席しております。

４月より委員長に就任されました中村新委員長ですが、本日はご都合が悪くご欠席とのことですので、椎井副院長に議事進行をお願い致したいと思います。
それでは、椎井副委員長、よろしくお願いいたします。

○椎井副委員長

それでは早速、議事に入らせていただきます。一戸さんと野牛さんから、番組の背景や感想などについて説明をお願いいたします。

○一戸プロデューサー

番組のプロデューサーを担当しました報道部の一戸です。本日はよろしくお願いいたしま

す。

花巻東高校の選抜高校野球準優勝というのは、報道部にとっても岩手にとっても今年一番の明るいニュースでした。決勝に進んだ段階で、勝っても負けても、番組を作ろうということに致しました。今回、甲子園には３年目の野牛アナウンサーと、今野カメラマンの２人を派遣しました。

花巻東高校のある程度の活躍は見込んでおりましたが、まさか決勝まで来るとは思っていなかったものですから、途中で派遣するスタッフを入れ替えるなどして、対応いたしました。

以前もご説明させていただいたと思いますが、使用映像の３分ルールというものがありまして、甲子園でめんこいテレビが撮影した映像であっても、この３分ルールが適用されます。試合はもちろんですが、球場内でのインタビュー、スタンドの応援の様子とか、開会式、閉会式とか、そういった映像もこの３分間ルールに含まれます。この３分しか使えないという制約のなかで番組を作らなければならない訳です。選抜高校野球は毎日新聞が主催ですから、その系列であるＴＢＳ系列は、試合映像をどこまでも使えますが、他の局はニュースでも番組でも３分以内となっております。ちなみに夏の大会は朝日新聞が主催ですので、テレビ朝日系列以外の局は、この３分ルールを守るということになります。

そういった制約のなかで３０分の番組をどう作るか？ということになります。決勝戦から放送まで１週間というスケジュールでしたので、普通ですと学校に選手に集まっていただき、並んだ選手にまとめてインタビューという形が一番考えられるわけですが、あえてそれはしたくなかったので、なぜ決勝まで進めたのか？その秘密はどこにあったのか？という部分を、寮生活などを通して少しでも浮き彫りにしよう、としました。

野牛アナウンサーは、入社して３年目になります。こう見えても一人でじゃじゃ麺屋に行って、平気でスポーツ新聞を広げるというオヤジギャル的な面もありまして、本人から後で話しがあると思いますが、野球が大好きな人間です。今回は試合映像の制約のなか、時間との競争のなか、なんとか放送日当日に完成いたしまして、放送に漕ぎ着けることが出来ました。

今日は皆さんにいろいろなご意見を伺い、今後の番組作りに活かしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

〇椎井副委員長

続いて、野牛さんお願いします。

○野牛ディレクター

今回、番組を担当いたしましたアナウンサーの野牛あかねと申します。よろしくお願い致します。

一戸の話にもありましたが、とにかく私は野球好きで、甲子園には試合の二日前に入りました。一度、他の番組のロケで一度大阪から岩手に帰ったのですが、夜行バスで大阪にまた戻って決勝をリポートすることができました。

まさかあそこまで勝つとは本当に思っていなかったので、あの感動のシーンに立ち会えたことがうれしく思えます。そのようななか、最初から甲子園にいた私たちが番組を作ることになりました。先ほど一戸がお話したとおり試合の映像が３分しか使えないという前提はあった訳ですが、そのことをいい訳にはしたくないと思いました。試合の映像が使えなければ試合の振り返りではなくて、普段の選手たちの様子を紹介することによって、どうしてここまで勝つことが出来たのか、ということが見えてくるのではないか？と思い、寮生活を取材しました。

寮では、普段野球をやっている時とは、違う選手たちの様子を見ることが出来ました。選手たちは素朴で、純粋な子たちで、常に「日本一になりたい」という目標を持ち続けていました。その「日本一」というのは、野球だけではなくて、部屋をきれいに掃除をしたりとか、挨拶をしっかりするということも含まれ、そのような選手たちの謙虚な姿勢も寮生活を通して見ることが出来ました。

また、選手全員が岩手出身ということで、「弱い」と言ってはなんですが、弱い岩手の野球を強くしたいという思いがそれぞれにあって、その強い思いが選手達の結束につながっているのだな、ということが、寮の生活を見て感じることができました。番組を通じて、そういった選手のことが伝えられたら、と思い制作しました。

決勝の日、私たちは甲子園で取材をしていたわけですが、地元岩手の取材班が学校や地域の人たちの様子を取材しており、それらの地元の映像があったからこそ、地域の人がこれだけ感動していたのだな、ということも伝えられたと思います。

最後になりますが、番組のディレクターを担当することになった時、正直なところ、最初は自分にディレクターが務まるか不安でした。初戦から甲子園での取材を担当し、選手たちが勝ち上がって行く感動を間近に見た私とカメラマンとで、今回の番組をなんとか作ることができたのは、これまで毎日取材に出て原稿を書き、報道で鍛えられてきた普段からの経験

が生かされたからだと思います。

ピッチャーの菊地雄星君は今後プロに行くと思いますが、私は、これからも花巻東に続く地元の選手たちを取材していきたいと思います。

本日は忌憚のないご意見をどうぞよろしくお願いします。

○椎井副委員長

野牛さん、ありがとうございました。それでは委員の方々からご意見を伺いたいと思います。中川委員からお願いいたします。

○中川委員

私もこの選抜の試合は、連日職場で見ておりました。感動の連続で、決勝まで行ったことが信じられなかったのですが、監督もこの番組で話していたように、準々決勝ですか？あのあたりからリアリティーをもって「日本一」という事がイメージできて来たのかな？と思います。

私ども産経新聞でも、決勝戦の後に「強さの背景に礼節教育あり」という記事を岩手から出稿しましたが、その記事を書いていても、それだけで決勝に行けるものか？という疑問がありました。菊池君を始めとする強い選手を岩手から流出させなかったという、私立の花巻東高校の取り組みというのもあった訳ですが、なんでこんなに強いのだろう、なぜ決勝戦まで行けたのだろう？という疑問がずっとありました。

その疑問をどれだけ解決してくれるのか？という期待を持って番組を見させていただきました。番組のなかでひとつなるほどと思ったのは、監督が強調されていましたけど、目標を立ててそれに向かってやっていくんだ、という部分でした。最近の企業の人事管理のようにも見えて、最初はえー？とも思ったのですが、日々の目標を作ってやるということが、野球にとって大事なんだなということが分かりました。ひとつ救われたのは、そうは言っても選手が書いた目標を映像で見たところ「死ぬ気でやる」とか「獣になった気持ちで」とか、高校生らしい精神論的なもので、男の子らしい目標だったので、ホッとしたところでした。

番組では、選手の私生活の部分にカメラがだいぶ踏み込んで撮っていたので、そこが興味深かったです。特に菊池君は、彼の部屋の本棚に並んでいるプロ野球の選手や監督の著書を見ただけでも、プロで一流の選手になりたいんだな、という、そういう思いが伝わってきて、これからの活躍がすごく楽しみです。そんな思いをさせていただいた番組でした。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは続きまして菅原委員からお願いいたします。

○菅原委員

今回の番組を作るにあたっては、結果が良かったので、非常に楽だったと思います。決勝戦当日は、一生懸命試合を見ていましたが、勝たしたかったと思います。本気で勝つと思っていたのですよ。勝ってもおかしくないゲームでしたね。決勝戦というのは、トーナメントで勝ち抜いた同士ですから、実力は互角と見るべきなので、女神がどちらに微笑むかにかかっていると思います。今回は惜しくも負けた、という感じだったのですが、決勝まで行ったので、文句はありません。

追跡ドキュメンタリーの番組が今まで何度もありまして、釜石のラグビーとか、最近は春高バレーとか、密着して日にちをかけて追うのだけれど、最後は残念な結果に終わることが多い訳です。今回の番組は棚ぼた的なところがあって、勝ったから作ったようなところが感じられました。勝った後に撮った映像なのか、その前から密着で押さえていたのか、不明瞭なところがありました。私の見方が甘かったのかもしれないけれど、勝った後に練習する場面を撮ったのか、その前に撮ったのか分かりづらかったですね。番審ではなくて、視聴者として見た場合、普通の人は１回しか見ませんからね。私は繰り返し見ませんでした。そうやって見た場合に、いつ撮影したのかよく分からない場面がありました。

今回はどの辺からマークしていたんですか？最初から？

○野牛ディレクター

選抜の大会前に、１回取材にお邪魔しています。

○菅原委員

そうでしょうね。そうだと思います。

それからインタビューの画角なのですが、いつもそういうことばかり言うのですが、色気のない画角でしたね。素人の方は、役者さんと違ってアップで撮られると話し辛いものです。選手も監督もインタビューは皆同じ画角だったので、もう少し工夫が欲しかったと思います。

今回の選抜は非常にめでたい展開で何も言うことはなかったですね。でもあそこまで行くと勝って欲しかったですね、悔しかったです。勝ってもおかしくない勝負だったですよね。

でも、決勝まで行ったら互角の勝負ですから、どちらが勝ってもよかったと思います。

番組の細かいことに関しては、別段これといって問題はありませんでした。ただ、決勝まで行った花巻東の凄さに比べたら、番組の作り方はそれよりちょっと下ですね。もう少し対等のレベルで出来たらもっと良かったです。ただ、映像の制約や制作時間のこともありましたから、それを言っても難しいことだとは思います。番組自体はあれで良かったと思います。文句はありません。これまでの密着取材の番組はいつも残念な結果に終わっていたので、今回は非常に良い結果で本当に良かったと思います。おめでとうございます。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは次に、齋藤雅博委員にお願いいたします。

○齋藤雅博委員

まず、あの時の感動を再び感じられる番組で、非常に良い番組だったと思います。先ほど３分ルールのお話がありましたが、一戸さんのご説明で良く分かりました。３分ルールの制約があっても、番組の目的としていた決勝まで行けた秘訣というのは、充分表現できていたと思います。

今年はＷＢＣの野球をずっと見て、その後高校野球を見てということで、仕事が手につきませんでした。今年の春はＷＢＣで日本人としての、高校野球では岩手県人としてのアイデンティティーを感じたのではないかと思います。皆さんも恐らく同じだと思うのですが、スポーツで県民がひとつに盛り上がったという意味で、選抜準優勝とういうのは非常に良かったと思います。

もうひとつ皆が注目していたのは、選手たちがオール岩手ということだと思います。そのことに関しては、インタビューのなかで選手が「県外には行かない」と話しており、良く表現されていたのでよく分かりました。

中川委員も仰っていましたが、番組のなかで感じたのは、監督が「目標を掲げること」と言っていたことでした。番組では、それをいろいろな場面で丹念に伝えていたと思います。寮のなかとか練習場にもありましたし、ユニホームの後ろには「けしてあきらめない」と書いてありました。そういったところもきちんと映像にしていて、良かったと思います。

決勝戦まで行けた秘訣のひとつとしては、監督が良い指導者であったことが挙げられます。監督はインタビューで非常にシンプルな言い方をしていましたが、「目標がいかに大事か、ど

う掲げ、どう実行するか？」きちんと表現していたと思います。秘訣としては、分かりやすい内容だったと思います。

３０分の番組でさらに３分ルールということが前提にあったのでしょうが、練習風景とインタビュー、応援風景等があって、バランス的には非常に良かったと思います。

最後はやっぱり勝たせてやりたいと思いました。選手は甲子園の土を持ち帰らなかったようですが、夏はぜひ優勝して欲しいな、と思いながら番組を見させていただきました。

〇椎井副委員長

ありがとうございました。中原委員、お願いいたします。

〇中原委員

野牛さんは野球が大好き、ということでしたが、私にはお天気を読んでいるイメージしかありませんでした。番組を見ましたら非常にスムーズに出来ていたので「野球が好き」という部分がこういうところに生かされているのだな、と思いました。これからの野牛さんのいろいろな展開に期待したいと思います。

先ほど３０分番組のなかの３分ルールとか、いろいろお話がありましたが、この種の番組の評価は非常にしづらいのです。勝ちました、オール岩手です等々あるわけですが、番組を振り返って、いざ問題点や課題を見つけようとしても、結果が良かったという印象があるものですから、どうしても気持ちがそちらにいってしまい、見終わったら良かったなぁという印象しかありませんでした。ということは、良い番組だったのだと思います。

先ほど監督が良かったという話しがありましたが、ここまでに至る前段に少年野球の盛岡東リトルシニアに、菊池君をはじめ３人が花巻東のレギュラーで居たということがあります。実はこの番組を放送した日の前後に、ＮＨＫ盛岡で花巻東を紹介する１５分ほどの番組がありました。そのなかで、盛岡東リトルシニアにいた２人の選手を取り上げていました。番組では花巻東がなぜ強いのか？ということで、盛岡東リトルシニアを紹介していましたが、１５分という番組のなかでコンパクトにまとめられていて、なるほどと思いました。

今回の番組は３０分間花巻東を主に紹介していた訳ですが、その前段もあるということで、番組で少し触れてはいましたが、盛岡東リトルシニアもあらためて掘り下げてもらえれば良かったと思います。また、時間がなかったというならそれまでですが、花巻東が準優勝したということで、他の岩手の高校球児の感想も聞いてみたかったです。決勝戦から放送まで９

日間ありました。番組制作上のタイムスケジュールはよく分かりませんが、その短い期間であってもその後のフォローが出来なかったものか？とは思いました。

番組を通じて、今の世の中の子供や親に対する啓発が随分あるな、と感じました。野球そのものというより、そちらの方が私にとっては関心が持てました。子供を育てる環境としてのチームという見方をすると、人によっては、非常に教育的な意味で濃い内容ではなかったかと思います。教育番組ではないのですが、そういう観点から見る人にとってはなかなか面白いのではないかと思います。野球そのものの結果は試合を見て知っていましたから、後から見るとなると、試合だけではなくもっと他の部分があると更に印象深くなったと思います。

番組タイトルにもあるように、間違いなく花巻東の活躍は球史に刻まれましたし、彼らの夢も、今後優勝すれば夢達成ということですから、タイトルも番組内容に合っているなぁと思いました。

番組全体をみますと、主役陣だけでなく、ベンチの人も、地元の人も、裏方の人も、子供たちも紹介されていましたし、応援団の表情もよく出ていました。そういった人々の気持ちもよく分かりました。

こういった番組を作る際に、野球のシーンをなるべく多くというのも、結果が良かっただけに分かるのですが、番組として視聴者に何を伝えていくか、ということがあると思います。今回の番組を見て、私は子どもの躾の問題、挨拶の問題、生活態度や基礎体力の問題に関心を持ちました。主題は野球であり「勝つ」ということですから、それはそれで良いのですが試合が終わって時間が経った場合に、別なもうひとつの部分で番組を展開出来るのではないか、という印象を持ちました。

最後になりますが、番組を見て感動をあらたにさせていただきましたし、これからの岩手の球児がどういうふうに甲子園を目指していくか？という点で興味を抱かせていただきました。つい最近、高校野球の春季岩手大会の盛岡地区代表に、初めて勝ちあがった高校がありましたが、花巻東の甲子園の活躍をテレビで見て「俺たちも」ということで頑張ったからではないかと思います。この番組を核とした広がりというものが、次に続く球児たちに影響があったとすれば、素晴らしい番組であったのではないかと印象を強く持ちました。

○椎井副委員長

どうもありがとうございました。次は村上委員からお願いいたします。最近野球好きの女性が増えてきたということでございますので、女性の目から見ての感想をお願いいたします。

○村上委員

実は私も野球が大好きで、イチローの絵を携帯の待ち受け画面に使っています。高校野球は、ここしばらくは熱心には見ていなかったのですが、地元ということで今回は仕事場でも試合時間になりますとテレビをつけて、チラチラと見ていました。そうやって応援していたら、あれよあれよと言う間に決勝戦まで勝ち進んだという印象でしたがが、実はそこまで行けたのはこういう理由があったのだということをあらためて感じさせていただきました。

いろいろなインタビューがあったわけですが、随分立派にきちんと話す選手たちだな、と思いましたし、監督さんもすごく良いお話をされているなと思いました。断片的には記憶していたのですが、あらためて見ると、岩手の高校生でも岩手の監督さんでもこんなにきちんといろいろなことがお話ができるのだな、と驚きもありました。監督さんは分かるのですが、高校生である選手たちから名言がたくさん出てきたのにはびっくりしました。

菊池選手からも柏葉選手からも、何度も何度も話しが出ていて印象に残ったのは「岩手県民であることを誇りに思う。県民の皆さんと一緒に戦っていました。」という言葉でした。チームメイトからも同じような言葉が出ていましたが、そういう言葉が自然と口に出てくるというのは、日頃から監督さんをはじめとする関係者の方々がそういう教え方をされていたのだとは思うのですが、メンタルな面で「誇り」とかそういったものが、彼らのベースにあるということが良く分かりました。

高校野球というと、どうしても泥にまみれるとか、鉄拳制裁みたいなものとか、そういうイメージが強かったのですが、学校の校風もあるのでしょうが、花巻東の場合は躾とか日常生活の面がしっかりしているなという印象でした。目標をちゃんと立ててとか管理システム的なものの他に、部屋を綺麗にするとか、寮の食事も率先して皿洗いや片付けをやったりとか、寮のおばさんにも元気で挨拶をするとか、女性の視点で見て、そのへんが気がついた部分でした。そういうことだったら、うちの娘を高校野球のクラブに入れたいとお母さん方も思うかもしれません。

野球がなぜ強くなったのか？という部分で、体力的なところとか、技術的なところとか、きちんと練習をするとか、勿論あるのでしょうが、それとは違ったところで精神的なところに、女性としては興味を惹かれました。今まではメンタル的な面で弱かった岩手の高校野球に光があたったのかな？と思いました。

私は盛岡第三高等学校出身で、初めて三高が甲子園に出場した翌年に入学しました。甲子園に行けるかな？と思って入りましたが、在学中は甲子園に行けず、しばらくはダメでした。

その後母校が２回目の甲子園出場を果たしたときに、たまたま甲子園に応援に行くことが出来ましたが、あの場で試合をして勝ち続けることがどんなに大変かということを甲子園の応援で身近に感じることができました。

今回は短い間での番組制作、本当にお疲れ様でした。

〇椎井副委員長

ありがとうございました。それでは東海林委員からお願いいたします。

〇東海林委員

私は野球というよりも、バレーボールでも野球でも高校生が、スポーツを通して一生懸命やっている姿を見ると涙が出ます。お母さん的になってきていて、本当にそういう映像が楽しみです。

今回の番組なのですが、番組タイトルを見て、前回の「春高バレー・コーチングキャラバン」のイメージがあったので、甲子園に向けて一生懸命練習しているのかな？と思い、実は拍子抜けしてしまいました。

１回見終わった後、早回しでもう１回振り返って見たのですが、インタビューがあって、試合の映像があって、試合があって、ご飯を食べて、またインタビューをして、試合があって、ケーキを食べていて、という形だったのです。私としましては、岩手県民が期待をしていますので、夏の大会に向けて始動したぞ、チームとして厳しい練習を重ねたぞ、というような映像が最後にあれば、私としては満足でした。

ただ、制作の期間を考えると、試合後１週間ではまだそういった映像は無理だったのだろうなと思います。もう準備していらっしゃるのかなとは思いますが、次に向けて期待したいと思います。

別件ですが、先日「老舗の落語番組」の公開収録が盛岡でありまして、それを見てきました。そのなかで、桂歌丸さんがお題の「持ってかないの？」に対して、「夏にまた来るから。」と答えて拍手を取っていました。岩手県民だったらそれが花巻東のことを意味していると分かっての拍手ですから、もう落語のネタになるほど岩手県民は大いに期待しているのです。次の花巻東の特番に向けてぜひ厳しい練習風景や、頑張っているから強くなったんだという映像をぜひ撮っていていただきたいと思いますし、その映像を楽しみにしています。

○椎井副委員長

ありがとうございました。それでは続いて久慈委員、お願い致します。

○久慈委員

はい、番組制作お疲れ様でした。私もあぶなく飛行機のチケットを取って決勝戦の応援に行きそうになった一人でございます。うちの親父は、かつて福岡高校で甲子園に行っておりますが、その親父が「菊池投手だけで勝ったのではないぞ」と言っていたのが、印象に残っておりました。番組も菊池選手だけではなく、いろいろな人にスポットを当てているところに好感を持ちました。よく名前が出ていた方々を中心に、いろいろな方を紹介していました。ああいう番組こそ、もっともっと補欠というか裏方というか、ベンチに入れず応援している選手とか、そういう方の声が入っているといいな、と思います。私が気がつかないでいて、番組の中には入っていたかもしれないですけど。

あと野牛さんを見ていて、大丈夫かな？と思ったことがあります。菊池選手の部屋に入っていましたが、菊池君のファンに刺されたりはしないですかね（笑）マスコミ初公開ですよね。どんな匂いがしましたか？男臭かったですか？（笑）そうですか、最近の高校生は男臭くないのですね（笑）番組を見ながら、そういうことをちょっと心配していました。それほどの有名人でプロは確実な選手なので、大丈夫かな？と老婆心ながらそのようなことを感じました。

岩手が誇る天才左ピッチャーの菊池君、そして私の地元福岡中学校出身で八戸光星にいる同じ３年生の右の天才ピッチャー下沖君、この二人の人生模様を比べるような番組とか、菊池君のライバルのような形で、他の学校の同世代の選手が出てくるような番組とか、今回の３０分番組では出来ないと思ってはいましたが、ぜひ幅広く紹介してもらえればなとは思います。

私は地元の福岡高校を応援しているので、夏にまた花巻東が甲子園に行くようになったとしたら、それはそれで困るというちょっと複雑な気持ちです。

○椎井副委員長

ありがとうございました。ここで野牛さんのコメントを貰うのもヤボなので（笑）では続いて吉田委員、お願い致します。

○吉田委員

スポーツマンの一人として、私はこの番組でもう一度あの感動を受けたいということで、何度も何度も見ました。本当に何度見ても味のある番組でした。なにしろ岩手の野球レベルは、全国のなかでは今までの何十年間もの間、本当にどうしようないという位のレベルだったと思います。そのようなかにあって、花巻東はこれだけの成績を収めることが出来た。ですから反響が大きかったのだろうと思います。岩手日報紙の読者覧にも、そのようなことが書かれていました。岩手日報にはこのことに関して、大変な数の投書が届いたとのことです。

やはり岩手県出身者だけで戦った、というところに大きな意味があったのだろうと私は思います。番組のなかで、今回の春の選抜の準優勝が岩手の野球史に残る、という意味の言葉がありました。この野球の歴史に残るだけではなくて、岩手の全てのスポーツ競技に大変な財産と言いますか、モノを与えたのだと思います。どんなスポーツであれ、やれば出来る、ということなのですね。それだけ目標の与え方が大事だということが番組では切々と描かれていました。私は番組を一番先に見たときに、選抜に選ばれて、その選ばれたという電話がかかってくる場面で、校長先生が電話を取った時から、選手をはじめ関係者の皆が胴上げのようなことをするシーンがありましたね。あのときからもうチームのモードは「日本一だ」というふうに感じましたし、その流れが最後まで続いたということではなかったのなと思いました。

特に光った点だけを申しますと、やはり佐々木監督の指導力が挙げられます。スポーツの世界において、指導者というものの位置づけというのは大きいのだな、と思いました。競技だけの監督さんではなく、普段の当たり前の生活面においても「日本一を目指そうよ」ということでしたが、こういう言葉をずっと聞いていますと、本当にこの番組の中にある教育的な意味合い、濃さというものが監督さんの言葉のなかにあったのだろうな、というふうに思うのです。佐々木監督は「岩手から日本一」、「決してあきらめない日本一」そういう言葉を絶えず出されていましたが、この言葉に岩手県民がどれだけ勇気づけられたかいうことです。

番組全体を通して見た場合に非常に印象に残っているシーンは、凱旋したときの選手一人一人の表情、その笑顔のカメラの撮り方、あの晴れやかな顔、そして地元の皆さんが選手を迎える一人一人の顔、そして「よくぞ頑張った」という表情。新聞には新聞の良さがある訳ですけども、テレビの良さというのはああいう部分なのですね。たった一言で笑顔、と言いますが、笑顔というのは凄く深いんですよね。そういう意味で笑顔の良さというのが、非常に大事なことだと思います。

この番組が４月１１日の３０分の放送だけで終わっているわけですが、たった１回の放送だけで終ってほしくないなと思います。絶えずそのようなことを放送で流していただく、そして勇気をまた奮い立たせる、そういうことをお願いしたいのです。

スポーツマンというのは、どん底に落ちなければ強くなれないのです、学業もそうだと思います。とにかくどん底に落ちて苦労して、悔しくてそこから這い上がる、トントン拍子の良い部分だけでは絶対強くなれませんから。そういうことも含めてこの番組の狙い、濃さ、というものが非常にうまく出されていたと思います。

最後に、ちょっとだけ希望を付け加えさせていただくと、文武両道の部分をもう少し入れて欲しかったと思います。だれか一人の選手を紹介して、こういうことで成績が上がったというようなことも入れてもらえれば、なお良かったと思います。以上です。

○椎井副委員長

はい、ありがとうございました。

私はいつも最後なので、皆さんの感想と多々ダブル部分もあるかと思いますが、ご容赦いただきたいと思います。

私も番組を見て感動をあらたにした一人でございます。番組の趣旨である花巻東高校の頑張りとその強さの秘密は、番組を通じて十分に伝わったのではないかと思います。本当にご苦労様でした。３０分ではなくもっと長く、６０分くらいになっても、もっと見たいなというのが感想でした。

もっと見たい部分というのは、この花巻東の活躍によって元気を貰った人の広がりが、各界、各層をめぐってかなりあるのだろうという思いからです。そういった人たちの声も加えてもらったら、さらに良かったのではないかな？とは思いましたが、番組自体は大変楽しく拝見させていただきました。

各委員から既に出ていましたけれど、花巻東高校の活躍は、ただ黙々と練習に精を出すということではなく、日本一になるのだという明確な目標があり、それが監督と選手の間で共有されていたことにあると思います。

日本一になるというのは、大変高い目標です。私は花巻東の過去の戦績や実力を詳しく知っているわけではないのですが、番組によると秋の県大会で敗れているようですね。負けた高校が、良くぞ日本一を目指すなどと言えたものか、と最初は思いました。

とかく、今までの東北の高校で、日本一というような高い目標を掲げたところはひとつも

なくて、だいたいは初戦突破とか、２回戦位までとか、現実的な目標を掲げるところが多かった訳です。花巻東は日本一ということで、やはりこれまでの殻を破るだけの練習も積み重ねてきたし、まるっきりそういう見通しが立たなくては、監督は選手に日本一という目標は立てないと思います。ある程度の裏づけ、自信というものがあったのだろうと思います。そういった自信を植え付けたのは、先ほどお話がありましたが、やはり監督だと思うのです。高校生のレベルで、監督の指導力は相当重いと思います。そういったことが、番組を見て伝わってきました。

我々にも、もやはり勇気と元気を与えてもらいました。実は私どもの会社も決勝戦は平日だったわけですが、現地の花巻の営業所長にすぐに応援に行けということで、出張で決勝戦の応援に行かせました。

準優勝が決まったときは、社員にカンパをさせまして、小額でしたが会社側と組合側を合わせてお祝い金を差し上げました。このような暗いご時世のなかで、本当に元気を与えてもらって有り難いなと思いました。

私はよそ者として思うのですが、これだけ地元や県民に大きな元気と勇気を与えてもらったにも関わらず、私だけかもしれませんが、意外と静かでもっと盛り上がっても良かったのではないかな、とは思いました。地元の花巻だけ盛り上がっているような感じで、県全体の広がりがちょっと弱いような感じがしました。各テレビ局さんはいろいろな番組を作られていましたが、番組の放送だけで終るのではなくて、これをきっかけとして花巻東の偉大な功績を勇気と元気に変えて、いろいろな分野で、検証していくことも必要なのではないのかな？というふうに思いました。繰り返しになりますが、全般を通じて大変楽しく見させていただきました。本当にご苦労労さまでございました。

○椎井副委員長

他にご意見のある方はいらっしゃいますか？では、中原委員、どうぞ。

○中原委員

私は、先ほど他の学校の球児も取り上げろ、と申し上げましたが、花巻東高校のライバル校というのは、どこなのでしょうか？

○野牛ディレクター

一関学院が、本当は甲子園に出る本命だった筈で、出場校決定のときには一関学院を取材のメインにしていたほどでした。その他には、盛岡大学付属高校があります。最近は強いところは殆ど私立高校なのですが、公立では福岡高校や盛岡一高などが強い高校として挙げられると思います。

○中原委員

そこいらあたりのライバル高校の一言が欲しかったなと先ほど思った訳なのです。ありがとうございます。

○椎井副委員長

無ければ、欠席委員からのリポートを事務局からお願いいたします。

○事　務　局

斎藤純委員と役重委員から届いております。

○斎藤純委員リポート

・甲子園出場が決まってからの後追い気味の取材なので、どうも物足りない。
・花巻東の野球部の歴史（あるいは学校の歴史も含めて）をちゃんと紹介してほしかった。
・監督と選手の言葉が実によかった。しかし、あまりに立派すぎるし、これではある意味、偏ってしまう。第三者の言葉がどこかにほしかった。

○役重委員リポート

４月１日、いつもなら定期人事異動の事例をもらい、菅家部署に挨拶回りをし、夕方早々に歓送迎会へ向かう、というのんびりの新年度初日。しかし、今年は様子が違っていました。辞令をもらうかもらわないかのうちに、部長たちが市長室にバタバタと出たり入ったり･･･。そして昼過ぎついに市長命令、「今晩中に夜行バスを準備し、市主催の市民応援ツアーを出せ！」と。それから、バス出発の夜７時までに全221人の行政区長たちに職員が手分けして必至で電話をかけ、参加者募集。さらに翌日、市民報告会の周知のため二度目の電話かけ。各種会議や行事のキャンセル等々。正直、大わらわでした。

というような市役所の必死の舞台裏はめんこいテレビでもどこの局も取材には来ませんで

したけれども、とにかく甲子園に出るってことはすごいことなんだなと、私も今回身をもって体験、実感したところです。

目玉はやはり何といっても「オール岩手」でした。あれがなかったら、同じ決勝進出でもここまで盛り上がったかどうか。私も教育委員会時代に地元高校として花巻東高校とは付き合いがありましたが、正直言って数年前までは野球部強しといえどもほとんど外人部隊でしょ、というイメージでしたから。

今回の番組構成の良さは、３０分というコンパクトな時間のなかで欲張り過ぎず、シンプルに監督と選手のコメント、表情を主体に作ったところだと思います。地元へのこだわり、野球だけでなく人間力を重視する考え方などが良く捉えられていました。実際、花巻東の野球部の子はグランドの脇を通ってもびっくりするくらい大きな声で挨拶してくれると地元住民にも評判なのです。そうした生活態度、礼儀など、寮生活にも焦点を当てたことで、強調されましたし、選手またそれ以外のベンチのメンバーなど、どの子の口からも「仲間がいたから」「チームで戦う、盛り上げる」といった言葉が実に自然に、明快に出ていたことには心から関心しました。やはり指導者なんですね。

この子たちがあまりにも素晴らしいからこそ、こういう言い方は怒られるかもしれませんが、番組を見終わって私はむしろ「負けて良かったのかもしれない」とさえ思いました。勝たせてやりたかったのはもちろん山々です。でも、もう一段、高みに登る階段を準備してもらったことは、長い目で見てこの子たちの将来のために、決して損にはならないと。そんなことを感じさせてくれたのも画面の爽やかさのおかげかもしれません。

裏方的には、市長の挨拶ちょっと力入りすぎてた？かなとか、隣のスポーツ振興課の若い職員が必死で作ったくす玉、ちょっと小さかったかなとか気になる部分はありましたが、十分楽しませていただいた春の大騒動でした。

〇椎井副委員長

ありがとうございました。では本日の番組審議会をこれで終了いたします。

〇事　務　局

今回の審議会の模様は、５月２３日（土）朝４時３０分から「めんこいテレビ番組批評」として放送いたします。次回は６月９日（火）を予定しております。本日はありがとうございました。

７．審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

８．審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

＊平成２１年５月１４日（木）　産経新聞　東北版

＊ 平成２１年５月２３日（土）午前４時３０分から４時４５分まで「めんこいテレビ番審リポート」内で放送

＊ 据え置きの書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

９．その他の参考事項

特になし